

試験研究成果普及情報

部門	花植木	対象	普及
課題名：アジアティック・ハイブリッドユリ葉焼け症の軽減法			
[要約]アジアティックハイブリッド・ユリの品種、コネチカットキングの葉焼け症を軽減するには、M球(12-14cm)を用い、解凍時から根を切らないように扱い、発芽後はCaとして0.3~0.5%含む塩化カルシウム液を出蕾時まで散布することで発生を軽減できる。			
キーワード(専門区分) 栽培(研究対象) 切り花類2-その他ユリ類 (フリーキーワード) 葉焼け、コネチカットキング、カルシウム			
実施機関名(主査) 暖地園芸試験場 花き研究室 (協力機関) (実施期間) 1995年度~2000年度			

[目的及び背景]

アジアティックハイブリッド・ユリなどでは、発芽後に生育が進み、草丈が10数cm程度になった頃から、展開して間もない葉の中央からやや先端よりの部位を横断するようにかすれ状の微小白斑、帯状白斑、先端部に茶褐色の帯状壊疽が生じることがあり、商品価値を著しく低下させている。品種間差異が顕著で、特にコネチカットキングで多発することが知られているのでその防止法を明らかにする。

[成果内容]

1. 用いる球根は相対的に小さな球根の方が発生が少ないので、M球(12-14cm)を用いる。L球(14-16cm)、2L球(16-18cm)の場合には鱗片を剥離して球根サイズをやや小さくする。
2. 球根冷蔵時、解凍時、植付け時に根を切らないようにする。
3. 植付け深度は10cm程度とし、深植えしない。
4. 葉焼けの発生は室内が単に高温になって発生するのではなく、相対的低温、昼夜の温度較差が少ない曇天、雨天が2~3日続いた後の晴天日に発生しやすいので、早めに十分換気する。
5. 発芽後Caとして0.3~0.5%含む塩化カルシウム液を、出蕾時まで1週間に3回散布する。散布量は茎葉全体に十分掛かる程度とし、目安としては生育盛期に1株3~5cc程度。
6. 遮光率40%以上の寒冷紗被覆は、その防止効果の不確実性とブラインド茎が多発することから好ましくない。

[留意事項]

1. 塩化カルシウムの散布時には展着剤を加用する。

2. 高温期の散布時には頂部の葉の重なった部位に薬害が生じやすいので、C a の濃度は0.3%程度の薄めとする。一方、気温の低い時には1.0%程度の濃度でも薬害は生じない。

3. オリエンタルハイブリッド・ユリで主として生じる葉縁の褐色斑、焼け斑は原因が異なるので、ここに記述された方法では防止できない。

[普及対象地域]

県下全域

[行政上の措置]

[普及状況]

[成果の概要]

表1 球根の大きさと葉焼け症状の発生程度(人為的再現処理)

処理時期	球根の大きさ	葉焼け症状 発生花茎率	葉焼け症状の 発生葉枚数率	障害程度別花茎分布割合				
				無	微	軽	中	甚
月 日		%	%					%
10.30	S(10-12cm)	12.0	1.3	88	4	4	4	
	M(12-14cm)	46.4	4.9	54	7	14	21	
	2L(16-18cm)	73.7	10.9	26		37	37	
11.04	S(10-12cm)	16.7	0.1	83	4		13	
	M(12-14cm)	3.7	0.0	96	4			
	2L(16-18cm)	64.7	6.0	35	24	24	17	

表2 石灰資材及びその散布間隔と葉焼け症状の発生程度(自然発生)

石灰資材	散布間隔	葉焼け症状 発生花茎率	葉焼け症状の 発生葉枚数率	障害程度別花茎分布割合				
				無	微	軽	中	甚
	日	%	%					%
A剤	2	10.0	0.5	90	8	2		
	4	25.0	3.1	75	13	5	7	
	7	20.0	3.0	80	5	5	5	5
B剤	2	12.5	3.5	87	3	3	7	
	4	20.0	2.5	80	10	5	5	
	7	25.0	3.3	75	8	10	7	
CaCl ₂	2	7.9	1.7	92		5	3	
	4	28.2	2.0	72	15	10	3	
	7	15.4	2.9	85	0	5	8	2
無処理	-	38.5	4.8	61	13	15	8	3

[発表及び関連文献]

1. 平成9年度花き試験研究成果概要集 [関東・東海編]. 千葉県-54~65.
2. 平成10年度花き試験研究成果概要集 [関東・東海編]. 千葉県-42~44.
3. 平成11年度花き試験研究成果概要集 [関東・東海編]. 千葉県-30.
4. 平成12年度花き試験研究成果概要集 [関東・東海編]. 千葉県-掲載予定(6編)